

(第2号より続く)

中国語の近代語彙の形成

F. マシニ

第一章 中国の言語と歴史：1840年～1898年

1. 3 翻訳者の先駆け：林則徐、魏源、徐繼畬

過去の幾世紀もの間に、中国人は常に異民族を“夷人”（野蛮人）と見做してきた。西洋人についても例外ではない。北京の朝廷は沿海地域から数千キロ離れているので、外国人との接触を必要と感じず、そのような接触を心配したり願ったりすることもなかった。中国の官吏たちは外国人や彼らの国の事情に対しても興味を示さなかった。特別に任命された学者が清王朝の為に編纂した正式な歴史書では、網羅的な記述というだけの理由で西洋諸国についても言及されていたが、その情報は間接的なもので、主に数世紀前に西洋の宣教師（特にイエズス会士）たちが自分の国について書いた著作から引用したものであった¹。

清代には、西洋の国を旅行した中国人も数名いたが、自分の見聞を書き記した人はごく僅かであった。17世紀から18世紀にかけて、数名の中国人がロシアを訪れた。この旅行に関するオリジナルな記録は、1688年清の使節団が北京からロシアに赴いた時に書かれた2冊の日記で、張鵬翮の『奉使俄羅斯日記』と錢良弼の『出塞紀略』であった。しかし残念なことにロシアの状況については、前者は全く触れておらず、後者も非常に簡単に述べていただけであった。

西洋に関する資料も非常に少なかった。18世紀初頭、山西省出身のキリスト教徒、樊守義（1682-1753、後の Louis Fan）が、イタリア人イエズス会士 Francesco Provana（1662-1720）に従って、ヨーロッパに行った。彼らは1708年1月14日マカオを発ち、南アメリカを經由して、翌年にヨーロッパに辿り着いた。1709年12月15日樊守義はローマでイエズス会の見習い修道士になった。ヨーロッパで10年間過ごした後、彼は Provana とともに帰国の途に着き、1720年7月12日広州に到着した。同年10月12日に彼は、ヨーロッパ旅行の見聞を書き記した『身見録』を康熙帝に献上した。樊守義のこの旅行記は、後に方豪氏によって発見され、彼

¹ F. Masini 1989を参照。（参考文献は文末参照）

の著書『中西交通史』(1983:855-862)の中で発表されている²。

樊守義の『身見録』は、恐らく中国人の手による最初の南アメリカと西ヨーロッパの旅行記の1つであろう。『身見録』の中に、ブラジルやポルトガル、イタリア諸国で見聞きしたことが書き記されており、ローマのセント・ピーター大聖堂やナポリの Saint Gennaro 遺跡についても、興味深い描写がなされている。本書に用いられている数多くの地名は、全て音訳語である。またポルトガルのスクールを「学校」「大学」「中学」「小学」などの語で呼び指しているのも言語学の立場からすれば、注目に値する³。

もう1冊早い時期のヨーロッパ旅行記は、『海録』である。この書は謝清高という船乗りが口述した内容を楊炳南という文人が整理したものである。謝清高は、西洋の定期船の乗組員として、1783年からの14年間、ヨーロッパで過ごした。この旅行記は旅行者自身が書いたものではないが、非常に貴重なオリジナルの資料である⁴。

『海録』の中で現地の政府機関や風俗習慣に関する外国語の単語が中国語に音訳されている。例えば、ポルトガルに関する1節の中で、最も重要な政府機関を表す名称は全てに音訳語を用いている(12オ-13ウ)。ポルトガル国王は“哩”(rei)と記され、皇太子は“黎番”(l'infante)と表記されている⁵。この独特の書物の中で、音訳語の外に後の著作に用いられた新語はほとんど見られない。

アヘン戦争の直前、中国の権力者は基本的に彼らの敵について何も知らなかったし、また外国人が中国および中国人のことをどのように考えていたかも知らなかった。

沿海地方の文武の役人は、外国について何の知識もない。彼らはただイギリスの名前を聞いて震えあがるだけで、イギリス人がどこからやってきたかも知らなかった⁶。

役人たちは外国人が話す外国語に何の興味も示さなかった。それを習うことは危険なこととさえ考えていた。

嘉慶年間(1796-1820)、広東で、漢字と英語(アルファベット)を音訳で対照させた本が出版され、中国人が英語を翻訳するのに便利であったが、広東の役人がそれを禁止した。(『海国図志』109-110)

この無知な時代は、道光皇帝の勅使、林則徐が阿片問題を解決するために広東に来てからようやく終わりを告げようとした。林則徐は1839年3月10日、英語の通訳を2人従えて広州に

² Dehergne1973, no.286を参照。

³ 私の知る限り、この本は20世紀以前に出版されていない。そうすると、この本のヨーロッパに関する知識は、中国で何らかの役割を果たしたとは考えられない。

⁴ 『海録』に関しては『小方壺齋輿地叢鈔』帙2、1-15葉ウ、陳觀勝1942を参照。胡秋原編『近代中国対西方及列強認識資料彙編』754頁に謝清高と楊炳南に関する簡単な伝記がある。

⁵ 陳觀勝1942:215参照。

⁶ 林則徐「附奏東西各洋越竄夷船嚴行懲辦片」徐鳴皋1979より引用。

到着した⁷。この2人は恐らく北京で唯一英語の分かる中国人であろう。林則徐が広州に到着してからさらに英語の通訳を数名雇い、初めて政府専属の英語通訳陣を確保したのである。

免職された林則徐は広州を離れてから数ヶ月後、すなわち1841年3月（西暦では3月23日～4月20日の間）に、奕山に提出した報告書の中で、広東の海岸防衛策について意見を述べている⁸。報告書の一節は、「夷情叵測宜周密探報」（外国について詳細に情報を収集する必要がある）という題であった。ここで林則徐は外国の新聞等の刊行物について興味を示している。林は次のように書いている。

マカオでは、中国人と外国人と一緒に暮らしている。各国から人が集まり、情報も最も多い。秘密裏に有能で堅実な人を派遣し、秘かに情報を探れば、外国の状況は自ずから前を持って手に入れることができる。また外国人が刊行した新聞紙というものもあり、7日（1週間）毎に出版されている。広東のことを自国に、自国のことを広東に知らせ、双方に情報を提供するものであって、中国の“塘報”にあたる。この新聞紙は元々中国人に読ませるものではなく、また中国人は外国語が分からないため読もうとしなかったが、最近、私は通訳を雇い、新聞を買い集め、秘かにそれを翻訳させた。新聞から得られた外国の情報が実に多い。（提案した）外国に備え、対処する方法は多く新聞の情報に基づいている⁹。

中国の軍隊は、林則徐が収集した情報を重要視せず、壊滅的な打撃を蒙ったが、通訳者たちは、西洋の情報を伝える道を切り開いたのである。

林則徐が1839年2月末（西暦3月15日）、広東督撫、怡良に送った手紙から（Hummel1943:389-390）、林則徐は、広州に到着して僅か数日後、すぐ西洋の新聞の翻訳を始めさせたことが分かる¹⁰。

⁷ CR March 1839, n.11, 608 ; 来新夏1981:211を参照。

⁸ 林則徐は1840年9月28日、北京に召還された。彼の後任、琦善が1840年末に広州に到着した。琦善の後を継いだのは靖逆將軍奕山で、彼の広州入りは1841年4月14日であった。Hummel1943 : 511-514, 126-129, 391-393を参照。

⁹ 『海国図志』2899-2900。この報告書は戈公振1927:99の注釈1にも見える。但し、戈公振は、この報告書は林則徐ではなく、魏源が書いたものと誤解していた。Britton1933:30-31も同じく間違っている。実は、この一節は林則徐の書簡「答奕將軍防衛省六條」の第6條である（『海国図志』2886-2900）。書簡の原文は、楊国楨1981:177-181にも収録されている。但し、誤植の為に上で引用した最後の一文がない。

¹⁰ 「新聞は系統的に翻訳されたのではないので、そもそも纏まりがない。現在、数冊抄録させてご覧に入れる。中にはでたらめなことも多く、事実とすることができない。外国事情を知る資料とするのみである」。楊国楨1981:44-45、来新夏1981:213にも引用されている。「夷情備探」は後の「海国図志」第51巻と第52巻の巻名になっているが、そこに収録されている文章は実は林則徐が翻訳させた文章であった。

上述のとおり、林則徐に従って広州に来た随員に2人の通訳がいた。袁徳輝と亞孟であった¹¹。袁徳輝は四川省の出身で、マレーシアのパナンにあるカトリックの学校でラテン語を学んだ後、1825年からの2年間、ロバート・モリソンが設立した英華書院で英語を習った。しかし彼は秘密結社に入ったことが咎められ、マラッカから強制退去させられた。袁徳輝が広州に移り住んでからも、英華書院の同級生だったウイリアム・C・ハンターと連絡を保っていた。1829年ハンターの推薦で、北京にある理藩院のラテン語通訳に採用された¹²。ハンターによると、袁徳輝はその後北京で林則徐のために働き、1839年また林則徐に従えられて広東にやってきた。また、これより前の1830年と1838年2回にわたって、洋書収集のために広東を訪れたことがある¹³。

一方、中国人の父とバングラディッシュ人の母を持つ亞孟は、年寄りの通訳で、長い間北京の会同四訳館で働いた¹⁴。彼はかつてインドのセランポレ英国教区で勉強したことがある。

林則徐は明らかに2人の語学能力をあまり信用していなかった。広東に到着してまもなく林則徐は、Russell & Co.で働いている若い通訳、ハンターにヴィクトリア女王に宛てた書簡を中国語に訳し戻す旨依頼した。この書簡は、袁徳輝によってすでに英語に翻訳されていたが、林則徐は英語に翻訳された内容が彼の原文と一致しているかどうかを確認したかったのである¹⁵。西洋人とのやりとりに対して、林則徐は、非常に慎重であったこと分かる。

林則徐は広州で、さらに地元の通訳を2名雇った。1822～1825年の間にアメリカの Con-

¹¹ 林則徐が広東で雇った通訳者に関する資料は、次の文献で見ることができる。Hunter1855:260-263、Britton1933:31-32、CR, VIII,2,June 1839,77、Chen1934:9-11、Chang Hsi-t'ung,1950:14、蕭致治・楊衛東1986:444-445、林永侯1985:121-125、陳原1961。

¹² 理藩院は1638年に、モンゴル、新疆、チベット及びロシアとの関係を担当するために設立された。1861年に総理各国衙門が設立されるまで外国、少数民族に関する業務を処理する数少ない政府機関の1つである。「理藩院」はそのひとつだった。Brunnert1911:491、Corradini1965、Hucker1985: no.3603

¹³ Hunter1855:260-263

¹⁴ この事務所は1748年に設立された。四夷館（或いは四訳館）と会同館が合併してできたものであり、属領地の外交使節の宿泊施設であった。アジアの諸言語（韓国語、ビルマ語、ベトナム語など）の通訳者と翻訳者を抱えていた。Hucker1985: nos. 2890, 5656を参照。

¹⁵ このエピソードは Hunter1882:139-140、同1855:262-263による。書簡の英語原文は、女王が正式に受け取ることにはなかったが、「帝国長官及び省当局から英国女王に宛てたアヘン禁止の要求に関する書簡」というタイトルの要約文は、CR (VIII,no.1,May 1839,9-12) に掲載された。書簡の完全な原文は、その後、CR (VIII,n.10,February 1840,497-503) で発表された。この書簡の日付は道光19年2月（1839年3月15日-4月13日）と記されている。中国語の原文を基にして作成された別の英語訳は、Fairbank1954:24-27に見ることができる。林則徐は、袁徳輝による英語の訳文とハンターによる中国語の訳文のどちらに対しても満足できなかった。そこで、同年11月、アメリカの医者ピーター・パーカーの意見を求めた。Chang Hsin-pao1964:137,n.51、林永侯1985:122-123。

necticut 州のコーンウォールで学んだ青年、林阿適と梁進徳であった¹⁶。特に梁進徳は西洋諸国に関する重要な情報の提供者であった。梁進徳に訳出された情報は後に林則徐によって西洋諸国に関する書物の一部となった。梁進徳は、梁阿発の息子であり、1823年11月20日にロバート・モリスによって洗礼を施された¹⁷。梁進徳は10歳の時、宣教師 E.C.ブリッジマンが彼の後見人となり、彼に英語を教えた¹⁸。梁進徳は1839年まで広東に留まり、その後、アメリカ貿易商の Charles W. King の仕事に就くためマカオに移った。同年5月、林則徐は梁進徳の優れた語学能力を聞きつけ、通訳に雇った¹⁹。

林則徐は元々個人的に通訳を雇う必要がなかった。というのは、彼はアヘン貿易を撲滅するために任命された勅使であって、地方政府も彼に出来る限りの協力をするようにとの勅命を受けており、林則徐は、政府の通訳を使って西洋人と折衝する事ができるからである。

中国の皇帝から外国の使節団を通じてヨーロッパの君主に送られた書簡は、ふつう外国の使節団が自分で翻訳することになっていた。なぜなら清王朝は、外国人が中国の言葉を学習

¹⁶ Britton1933:31は、林阿適の正式な名前を Lieaou Ah See とし、別名を William Botelho と記している。林が通っていたのは、アメリカンインディアンやハワイ人、異教徒の若い世代のための学校であった。George1931:102-103参照。ただし私はこの著作を調べる事ができなかった。引用は Britton1933:31-32による。林阿適は恐らく最初のアメリカ留学の中国人であった。20年後、中国人容闈が故ロバート・モリソンの名前にちなんだプロテスタントの学校に入学し、その後、1847年から1854年までイエール大学に学んだ。鐘叔河1985:122-140を参照。林阿適については、林永俣1985:123と1.4.4節の脚注を参照。

¹⁷ Wylie1867:21

¹⁸ 私は、梁進徳の正確な誕生日を確定することができなかった。しかしながら、林永俣1985:123-123は、梁進徳が10歳の時、ブリッジマン牧師が彼の後見人となった。その時はブリッジマンが「広東に到着したばかり」と書いている。ブリッジマン広州到着は1830年2月19日なので（Wylie1867:68）、梁進徳は1820年頃の生まれということになる。このおおよその期日は Wylie 1867:21の次の記述によっても確認できる。「1823年、彼（梁阿発）は再び広東に帰郷し、その年の11月20日息子を持ってモリソンを訪ねた。モリソンは梁進徳に洗礼を施し、Leang Ysin-sih（梁進徳）と名づけた。」

¹⁹ 林則徐とその通訳たちに関する初期の欧文資料では、梁進徳に関する情報がほとんど含まれていなかったが、ハーバート燕京学院にある海外布教協会アメリカ分會の公文書について調査を行った中国人研究者、林永俣は、梁進徳について研究報告を提出した。ただし林永俣も、梁進徳がつまり Leang Tsin-tih であるという Wylie1867:21の言及に気づいていなかった。林永俣は、1834年梁進徳が父親と一緒にシンガポールに行ったと記している。しかし、このことは Wylie の著書で確認できない。Wylie によれば、その時は梁阿発が広東に滞在し、ロンドン伝道会の「ネイティブの教師」として働いた。1834年、梁阿発はカソリックの文書を配った罪で他の中国人信者と共に投獄された。その後、梁阿発はまずマラッカ（1837年）に移り、そして1838年シンガポールに移住した。梁阿発は1839年中国に戻り、1855年広東で死去した。

すべきで、中国人が外国の言葉を習う必要はないと考えていたからである。1757年、北京にロシア語学校（俄羅斯文館）が建てられ、ロシア語通訳の養成が行われた。これは清王朝が外国語に対する態度を改めた最初のシグナルであった（§1.2の注1を参照）。これまでにロシアに派遣された使節団の通訳はいつもラテン語の分かる北京のカトリックの宣教師が担当していた。すでに述べたように1688年、ロシアを訪れた清の使節団の中で通訳を担当していたのがイエズス会士の張誠（Jean-François Gerbillon）と徐日昇（Thomas Pereira）であった。

林則徐は他と異なる方法で仕事を始めた。彼は勅使としてアヘンという難問の解決に着手したとき、2つのことの大事さを心得ていた。つまり1つは、外国人及び彼らの政府は朝廷の真の意図を理解するべきだということと、もう1つは、中国人は、外国人が中国とその政府に対してどのように考えているのかを知らなければならないということである。林則徐の最終目的は西洋を理解することであった。これは自己の知的好奇心を満たすためではなく、中国が外国の脅威に対して適切な反応をするための準備を整えておくためであった。

林則徐は西洋に関する直接の情報をほとんど持っていなかった。このような状況の下で彼の一番の関心はもっと西洋諸国の地理やそしてかれらの歴史、政治制度等の知識を学ぶことであった。

若い梁進徳は恐らく林則徐の通訳陣の中で完全な西洋の教育を受けた唯一の者であろう。彼が林則徐に初めて紹介したのは、1834年ロンドンで出版された Hugh Murray の著作 *An encyclopaedia of geography* である²⁰。梁進徳がまたこの本の何章かを翻訳したようである。後に彼が翻訳した部分は林則徐の名前で、『四洲志』という書名で出版された²¹。林則徐は梁進徳を通じて西洋のことや西洋人が中国について何を考えていたかなど多くのことを知った。こういった情報は主に『澳門雜録』（*Canton Register*）『澳門月報』（*Chinese Repository*）『澳門新聞録』（*Canton Press*）から得たものである。これらの定期刊行物の一部は、マカオと広州在住の外国人コミティーが出版したものの刊行物である²²。林則徐は広州在住の中国語

²⁰ このことの証拠について、CR,X,1841,576-577参照。Chen1934:9も参照。

²¹ Britton1933:32によると、この書は1841年出版された。しかし Chen1934:25は、当時この書は巻を分けて出版されることがないと考えている。海老沢1960:2682は日本には『四洲志』の最初の版本があり、それに記されている日付は1838年であると指摘している。『四洲志』は後に『海国図志』に収められ、さらに『小方壺齋輿地叢鈔・再補編』に収められた。

²² 魏源がかつて、『海国図志』に収められているこれらの雑誌、即ち『澳門雜録』『澳門月報』『澳門新聞録』は広州ではなくて澳門で印刷されていたと言っている。Britton1933:33はこれに対して、「恐らく林則徐と魏源は、外国人がそれらのものを広州で出版していたという事実が不適当だと考えただろう」と説明している。中国で印刷された最初の外国語の新聞は、1822年9月12日にマカオで創刊されたポルトガル語の新聞 *A Abelha da China* であった。最初の英字新聞は、James Matheson が編集した週刊紙、*Canton Register* である。第1号は1827年11月8日に広州で出版された。

の分かる外国人に教えを請うたこともある。アメリカ人のパーカー（Peter Parker）は林則徐のために Emmerich de Vattel の *Le droit des gens*（『各国律例』）からいくつかの文章を翻訳した。それらは後に『海国図志』に収められた（後詳）。林則徐がパーカーを信用していた証拠として、持病ヘルニアのためにパーカーにヘルニア帯を処方してもらったという事実がある²³。

もし林則徐が当時の内閣中書、友人の魏源に研究の成果を分け与えていなければ²⁴、ほとんどの中国人は、西洋諸国に関する知識を豊富に提供したこれらの翻訳資料を読むことができなかったろう²⁵。林則徐は、広州でアヘン問題の処理に失敗し、皇帝の寵愛を失ってしまったので、これは自らの著書を出版する唯一の方法だと考えたのかもしれない。魏源は林則徐が広州から持ち帰った西洋に関するすべての資料を集め、さらにほかの宣教師が書き残した資料や中国独自の歴史資料を加え、1844年『海国図志』という書名で出版した²⁶。『海国図志』は極めて大きな成功を収め、何度も版を重ねた。その理由は、この本が西洋人、彼らの国及びその技術に関する近代最初の書物であったからだと考えられる。

初版序文（道光22年12月付=西暦1843年1月1日～29日）の中で、魏源が次のように書いている（この序文はその後の版本にも掲載されている。ただし50巻を60巻に改めた。）。

『海国図志』60巻は何を典拠にしているか。一つに前広東広西総督林尚書が西洋の書を訳した『四洲志』が挙げられる。さらに歴代の歴史書、及び明以来の島志、近年の西洋

主な協賛者はモリソンと James Sade である。新聞社は1839年広東から澳門に移され、1843年には香港に移された。その時、*Hong Kong Register* と改名されたが、1853年に廃刊した。*Chinese Repository* は月刊誌として1832年5月ブリッジマンによって創刊され、1851年まで出版された。*Canton Press* は1835年11月12日に週刊誌として創刊され、1839年澳門に移り、1844年に廃刊した。戈公振 1927:81-82、曾虚白1966:158-160、Britton1933:16-29、CR,V,no.4,August 1836,145-160 “European periodicals beyond the Ganges” を参照。1,2節と1,6節も参照。

²³ このことは、パーカーが毎年提出したレポート「医療伝道会在華医務報告」1839年度分（第10号報告）の No.6565の診察記録に見える。CR,VIII,no.12, April 1840,634-637を参照。パーカーは「私は直接彼を診察することが出来なかった。なぜなら彼は外国人が親密になろうと近づいてくるのを恐れていたからだ。」と言っている。結果としてパーカーは所有していたヘルニア帯を全部、北京の通訳（恐らく亞孟であろう）を通じて林則徐に送った。処置の結果に関してパーカーは「ヘルニア帯を大臣に送ってまもなく、よくなったという返事があった…」と書いている。また Chang Hsi-t'ung,1950:11-13、Chen1934:10-11も参照。

²⁴ 1841年8月上旬、林則徐は江蘇鎮江で、広州で収集した資料を魏源に手渡した。来新夏1981:364を参照。

²⁵ 魏源は『海国図志』初版の序文に“内閣中書邵陽魏源”と署名している。『海国図志』12頁。

²⁶ 『海国図志』初版は50巻であったが、1847年には60巻、1852年には100巻、1895年には125巻にまで増訂された。1847年、Stanislas Julien は *Journal Asiatique* で、初版の『海国図志』について情熱あふれる評論を書いた。『海国図志』のその他の版本については、Chen1934を参照。

の地図と著作を調査しまとめた。…古人の海図の書とどこが違うのであろうか。つまりそれらの書が中国人が西洋について語るものであるのに対し、本書は西洋人が自ら西洋を語っているのである。

以上でわかるように、魏源の目的は西洋人によって記述された中国の外部世界に関する百科全書のようなものを出版することであった。1847年版の『海国図志』は60巻であり、第1巻に「籌海篇」という一節がある²⁷。第2巻は地図類のリプリントで、第3巻～第43巻は各地域と各国を紹介する部分である。魏源はまず『四洲志』の内容を再録した後、中国の歴史書から引用した資料を補っている²⁸。さらに十数冊の外国人が中国語で書いた地理書を引用している²⁹。これらの著作のほとんどが、19世紀初期在華したプロテスタント宣教師によって書かれたものであった。『海国図志』はまた17世紀のイエズス会宣教師やその他の西洋人の著作を使用していた。最も多く引用されたのはプロシア人宣教師ギュツラフ (Karl Friedrich August Gutlaff) が編纂した『萬国地理全図集』であった³⁰。イタリア人イエズス会士アレニーの『職方外紀』(1623)も、大部分『海国図志』に収められた。第47巻では、魏源はマテオ・リッチの『坤輿萬国全図』序文を、「利瑪竇地図」と改題したうえ全文再録した。その他に、フェルピースト (Ferdinand Verbiest) 『坤輿図説』の地球概論に関する章も取り入れた³¹。

魏源はまた他の著作から、一部の国の状況に関する部分を引用した。例えば、アメリカ人宣教師ブリッジマンが1838年シンガポールで出版した『美理哥合省国志略』やモリソンが著者と思われる『外国史略』、アメリカ人ウェー (Richard Quarterman Way) が著した『地球図

²⁷ 『海国図志』で、この一節の最初に、“魏源輯”との文言がある。しかし、これはただ形式上のことであろう。林永侯1985:135-136、及びその他の研究者は、作者は恐らく林則徐で、魏源ではなかったと考えている。確かに、当時林則徐は広州での任務に失敗し、苦しい立場にあったので、このようにしたのであろう。「籌海篇」の英訳文は、Fairbank1954:30-35を参照。

²⁸ 林則徐の翻訳官が翻訳した著作の他に、19世紀初頭西洋人が中国語で書いた書籍の抜粋もある。魏源は、『海国図志』の中でまた、歴史書(『漢書』から『明史』まで)中の外国に関する部分を引用した。さらに、『海録』や、陳倫炯が1744年に出版した『海国聞見録』(Wylie1867:59を参照)、葉鍾進が1834年前後に出版した『英吉利国夷情記略』などの歴史・地理に関する著作を引用した。1840年以前に中国人が書いた西洋に関する著作(これらの著作の大部分は『海国図志』に収録されている)については、『近代中国対西方及列強認識資料彙編2』を参照。

²⁹ Barnett1970を参照。

³⁰ Wylie1867:60を参照。『萬国地理全図集』にある一節は、『小方壺齋輿地叢鈔』帙12にも見られる。恐らく『海国図志』から採ったのであろう。

³¹ これらの著作の概要については、Bernard1945及び徐宗澤編1949:313-320を参照。『職方外紀』の成立事情については、D'Elia1938:49-50に詳しい。利瑪竇の『坤輿萬国全図』については、D'Eliaの研究、陳観勝1939、D'Elia1961を参照。

説』などからである³²。

『海国図志』に収録されたプロテスタント宣教師の著作に対して、新語という点から研究するのは、非常に興味深いことである。ブリッジマンの『美理哥合省国志略』から引用された部分に“貿易、文學、法律、火輪船、火輪車、火車、公司”などの語が含まれている。宣教師の著作が『海国図志』に収録される前、その中の新語は恐らく非常に狭い範囲でしか用いられてなかったであろう。魏源の著作によってこれらの新語がまず中国、そして日本で普及したのであった。

「籌海総論」という海防政策を論じる48、49、50巻に続き、51、52巻は「夷情備采」という標題が付いている。この部分には、林則徐が外国の書物から翻訳し、朝廷に提出した文章が数編収められている。内容はアヘン貿易に従事していた外国人と、特に中国人に対する彼らの態度について記しているものである。51巻の中に収録されている5篇の短い文章は、「論中国」（2921-2941）「論茶葉」（2935-2941）「論禁煙」（2943-2964）「論用兵」（2965-2984）、及び「論各国夷情」（2985-2995）であって、いずれも『澳門月報』（*Chinese Repository* 注19を参照）から翻訳したものである³³。翻訳は、林則徐配下の通訳によって行われた。『海国図志』に収められているその他の訳文は、広州で出版された外国の雑誌から翻訳したもので詳細は次の通りである：『澳門月報』に掲載されていた、インドに関する報告書を書き直した文章（784-788）、『澳門新聞録』（*Canton Press*）の、フランスの南極探検隊に関する文章（2518-2523）、『澳門雜録』（*Canton Register*）の、外貨両替に関する文章と、外国人が中国語を勉強する時の発音上の困難さを取り上げる文章（3419-3421）である³⁴。

³² 『海国図志』の欧文原著についての研究は、Barnett1970を参照。宣教師全般については、Wylie1867を参照。これらの著作は『小方壺齋輿地叢鈔・再補編』帙12にも見られる。『海国図志』に基づいたと思われる。

³³ 本篇の最後に、次のように西洋人の中国語学習に関する情況が記されており、注目に値する。「西洋人の中で中国語に関心を寄せているのは、イギリスのほか、ゲルマン国が一番であり、プロシアがこれに次ぐ」（『海国図志』2930）。「モリソンは中国の文字について概略しか知らないと言っている。もしその文学を深く知っていれば、甚だ深遠なことと言える。世界中、イギリスだけが中国の歴史や言語に関心を持っている」（同上2934）。

³⁴ 私はまだこれら翻訳の原文が見つかっていない。恐らく、これらの訳文は、*Chinese Repository*、*Canton Register* 及び *Canton Press* の忠実訳ではないであろう。Britton1933:33は、「論茶葉」は“Description of the Tea Plant”の抄訳であるとしている。この記事は、Samuel Wells Williams が書いたもので、*Chinese Repository* VIII, no.3, 1839.7:132-164に発表されている。アヘン貿易増加に対する西洋人の態度に関しては、恐らく以下の2篇の論説をもとにしている。1篇は Algernon Thelwall の評論集であり、タイトルは“The iniquities of the opium trade with China : being a development of the main cause which exclude the merchants of Great Britain from the advantages of an unrestricted commercial intercourse with the vast empire（対華アヘン貿易の罪惡——イギリス商人はいま

52巻の中に、「華事夷言録要」と「貿易通志」と題する短い文章が収録されている(2997-3030)。後者の著者はプロシアの宣教師ギュツラフであった。他の何篇かの文章は、*Le droit des gens* (『各国律例』)から訳出されている。原著者は Emmerich de Vattel であって(本の中では「滑達爾」と訳されている)³⁵、翻訳者はパーカーと袁徳輝であった(3031-3088)³⁶。

林則徐配下の通訳が翻訳した文章のうち、一部は上奏文に添付され北京へ送られた。したがって、これらの翻訳文が正式に中国の皇帝に届けられた、中国人によって翻訳された最初のものかも知れない³⁷。

『海国図志』の最後の部分(53巻～60巻)には翻訳を含む幾つかの文章と注釈、図表が収録されており、西洋の武器の使用方法及び構造について紹介している。特に59巻の「西洋器芸雑述」では、西洋の武器、器機類を紹介すると同時に、英語の26のアルファベットについて説明し、漢字を用いてその発音を記している。この簡単な紹介は前述したブリッジマンの『美理哥合省国志略』から引用されたものである(3425-3429)。

だこの巨大な帝国と無制限の貿易関係を結んでおらず、その原因は多岐にわたるが、このことがアヘン貿易の弊害を生み出している”(ロンドン, 1839年)で、この文章は Chinese Repository VIII, no.6, 1893.10:310-317に発表されている。もう一篇は“Remarks on the present crisis of Opium Traffic (昨今のアヘン貿易の危機を評す)”(Chinese Repository VIII, no.1, 1839.5:1-37, Chinese Repository VIII, no.2, 1839.6:57-83である。

³⁵ 書名は、*Le droit des gens ou principes de la loi naturelle appliqués à la conduite et aux affaires des nations et des souverains* (『国際法、或いは国家、主権的行為と行政上における自然原則』)という。全2巻、1758年、スイス Neuchâtel で出版された。『海国図志』に収録された何篇かの訳文は間違いなく英語から訳出されたものである。1840年以前、この著作はイギリスで8回、アメリカで12回翻訳された(再版本と新訳本を含む)。私は袁徳輝とパーカーの中国語訳はどの英訳本に基づいて翻訳されたのかを断定することが出来ない。*Le droit des gens ou principes de la loi naturelle appliqués à la conduite et aux affaires des nations et des souverains* 参照。本書の著者は M de Vattel で、序文は Albert de lapradelle による。巻1-2は1758年に再版され、巻3の英訳本は1916年 Carnegie Institution of Washington より出版された。

³⁶ パーカーは、林則徐のヘルニア症(注23参照)に言及したとき、自分の訳文について次のように述べている。

1839年7月、彼の最初の要求は、病苦の軽減ではなく、『各国律例』の条文の訳文がほしいということであった。翻訳は、ベテランの「行」の商人を通じて送られ、内容は、戦争、封鎖、禁輸、機密保持に関するもので、毛筆で書かれている(CR, VIII, no. 12, April.1840:635)。

³⁷ 「論中国」に付けられた注釈では、魏源は次のように指摘している。

「論中国」は、道光19年から同20年(1839-1840)の新聞記事である、広東・広西の総督林則徐によって訳出され、そのうち4ヶ条が上奏文に添付して皇帝に進呈された。また「華事夷言録要」(2997)の注釈の中で、魏源は次のように述べている。

「華事夷言録要」は両広の総督林則徐によって翻訳されたもので、両江(江蘇・江西)の総督裕謙によって上奏された。

中国と西洋の学者はすでに文化、軍事の角度から『海国図志』の重要性を強調している。『海国図志』は、中国は、ただ実用的な知識と技術を獲得するだけで外国の脅威に打ち勝つことが出来るという信念のもとで、系統的に西洋諸国、及び西洋の軍事技術に関する知識を広めようとする最初の試みである³⁸。

一般的に言えば、中国語語彙体系への『海国図志』の影響は、多かれ少なかれ無視された節がある³⁹。しかし疑いの余地もなく本書は、西洋の知識を普及させる面で重要な役割を果たした。そして本書のもう1つの重要な貢献は、それまでに外国人と接触できた一部の地域でしか使用されなかった語彙が、本書によって中国全土さらには国境を越えて広めたことである。実際に『海国図志』は、日本にも多くの読者がいた。日本はまず、『海国図志』の簡約本を出し、後に完全版を出版した。その時、日本はちょうどアメリカと関係を樹立しようとした時で、本書は西洋に関する重要な情報源となったのである（1.5節参照）。

言うまでもなく、ある語が初めて使用された時期を正確に確定することはできないが、少なくとも一部の語について、ある時期以降にすでに存在しているという事実を確定することはできる。

広範囲な研究が行われる前、我々は、どの語が『海国図志』に収録されている翻訳文の中で初めて使用されたかを断言することは出来ない。というのは『海国図志』に使用されている語の一部はすでに魏源が利用した早い時期の翻訳資料の中に存在している場合もあるからである⁴⁰。

ある語が『海国図志』の中で初めて使用されたのかどうかについて確信を持って述べることはできないが、本書は近代語彙の形成に関して代表的な著作と見なすことができるし、中国語、特に中国語の語彙に対する西洋言語の影響を研究する上で有用な資料である。

『海国図志』あるいはその資料となった翻訳文に用いられていた語彙を分析する前に、まずその文体的特徴に言及することは有益であろう。『海国図志』の言葉は、極めて平易で、二音節語を多用しており、古典語の虚辞や口語の中では用いられない難解な表現は意識的に避けられた。『海国図志』のこのような言語上の特徴は、そのまま19世紀末の中国の時事、政治の文章の特徴となった。

『海国図志』の中で、国名や地名を表すのに音訳語が用いられている。その大部分は、17

³⁸ 林則徐の軍事上の貢献については、Chen1934、政治上の貢献については、Chang1950と Fairbank 1953:178-186をそれぞれ参照。

³⁹ 私の知る限り、『海国図志』を使って中国語語彙の歴史的発展を研究をしたのは、王力1958-1959:523-524だけである。

⁴⁰ 例えばプロテスタント宣教師による中国語の著作。『海国図志』に収められている中国人の文章、例えば葉鐘進（1834年頃）の書いた「英吉利国夷情記略」（『海国図志』1869-1893）に“新聞紙”、“公司”などの語が見られる。

世紀カトリック宣教師が中国語で書いた地理書やその後の地理書、旅行記に由来している。官職や政府機関の名称を中国語に翻訳する時も、同じ方法が取られた。例えば『四洲志』と *Chinese Repository* 記事の中国語訳の中で、English parliament は“巴厘滿”、the House of Commons (下院) は広東語の発音で“甘文好司 *gemmen housi*”に翻訳されている(官話なら *ganwen haosi*)。音訳語は重量の単位にも用いられた。例えばたイギリスのポンドは広東語で“磅 *bong*” (官話なら *bang*) と訳され、トンは“躉 *den*” (官話なら *dun*) に訳されている。

音訳語は19世紀にわって広く使用されていた。しかし中国語への影響は意識語 (semantic loan) や直訳語 (loan-translation) のそれに比べてそれほど大きくなかった。意識語は外国語を参照しながら、その意味を解釈・変化させることによって作られた訳語である。それに対して直訳語は、原語の形態素配列に厳格に対応させることによって造られた訳語である。意識語、直訳語及び中国語自前の新語は、古典中国語に新しい言葉を補給する源になっており、近代中国語の語彙体系を形成していくのである⁴¹。

例えば『海国図志』に見られる“公司”という語は、現代中国語の中でも「会社」や「ビジネスマンや生産者の組織」という意味で使われているが、『海国図志』が出版された当時この語は、イギリスの東インド会社を指すだけであった。この語は『海国図志』を通して他の地域に伝わり、やがてどんな会社でも指すことができるようになった。

『海国図志』の147頁に、次の一節がある。

広東で貿易を行う西洋の国は10カ国以上あるが、みな個人の形であって“公司”がない。イギリスだけは、“公司”を持っている。“公司”とは、数十の貿易商が資本を出し合い、共同経営する組織である。彼らは、協力して仕事をし、資本金に応じて利益を分け合う。

この記述からも分かるように、“公司”は元々 *United East India Co.* を指していた。この会社は、2つの東印度会社の合併により、1600年に設立されたのである⁴²。

『海国図志』が出版された後“新聞”という語も普及した。この複合語は、唐代では「最近耳にした事実」という意味に使用され、宋代では、「公的でない報告書」という意味であったが、1828年～1829年にプロテスタントの宣教師がマラッカで出版した最初の雑誌『天下新聞 (*World News*)』の名前に使用された為に、“新聞”という語はやがて「ニュース」「情報」という意味で用いられるようになった。“新聞”は後に、“新聞紙”の造語成分となったが、これは *newspaper* の直訳語であり、西洋人がマカオや広州で印刷した定期刊行物をさすのに用いられた。“新聞紙”が後に、新語の“報紙”に取って代わられ、19世紀末に姿を消

⁴¹ 語の分類に関しては、第2節(次号以降)を参照。

⁴² *Hunter188230*に同様の説明がある。ハーモノヴァ・ノヴォトナ1974:59は、「公司」は1899年から1910年の間に創り出されたものと誤った記述をしている。

した。

林則徐の『四州志』に見られる中国語独自の新語⁴³、“國會”は英語 *parliament* の訳語である。“國會”は、恐らく『四州志』を通じて日本に伝わったと考えられる。その後まもなく「国会」は日本最初の立憲議会の名称となった⁴⁴。

“権利”という語の出現は、より遅いと考えられる。なぜならば、Vattel の *Le droit des gens* から訳出した一連の文章では英語 *right* の訳語に用いられなかったからである。英語の *right* 訳語としてパーカーが“例”を用い（『海国図志』3036）、袁徳輝が“道理”を使用した（同書3036）。

一部の研究者は、“貿易、交易、進口、出口”といった貿易関連の用語が日本語からの借用語だと誤解している。しかし実際には、これらの単語は『海国図志』の中にすでに存在していたのである。さらに、接頭辞の「火」を用いて西洋の機械類を言い表す語に、例えば、“火車”⁴⁵ 或いは“火輪車”（train）、“火輪舟”或いは“火輪船”（steamship）、“火輪機”（steam engine）などがあり⁴⁶、また『海国図志』に“鐵路”（railway）、“鐵轍”（track）、“文學”（literature）、“法律”（law）、“政治”（politics）などの語を見出すこともできる。

『海国図志』は沿海地方と都の知識界において大きな関心を引き起こした。これはアヘン戦争の結末と関係があったであろう。この戦争は中華帝国の失敗で終結したのである。『海国図志』は、「1884年夏、大量に印刷され、都と各省の高級官僚に配られた」ことが知られている⁴⁷。

アヘン戦争までに、少数の開放的な官僚だけ、中国南部と接触の人々から知識を学ぶ重要性を知っていた。戦争後、外交事務の重要性は日増しに明らかになった。『海国図志』は、進歩的な知識人の間でも重要な役割を果たした。『海国図志』に対する知識人の興味は、西洋の地理だけではなく、西洋諸国の政治制度にも向けられた。

⁴³ 原文は *autochthonous neologism* で、ここでは「中国独自の新語」と訳す。原著者の説明によれば、19世紀中国で造語された新語のことである（原著 p.29、note74）。もう1つの用語、*autochthon* は、原著者は19世紀以前にすでに中国に存在していた語のことを指す。ここでは「中国既存語」と訳す。——訳者注。

⁴⁴ Pittau 1967:14は、「国会」という語は、1861年にブリッジマンの『大美聯邦誌略』を通じて日本に伝わったと指摘している。ブリッジマンのこの書は3つの版本があるが、上記の書名が見あたらない（Wylie 1867:70）。1861年上海改訂第三版の書名は『聯邦志略』である。私が閲覧できたのは『小方壺齋輿地叢鈔・再補編』帙12に収録された『美理哥国志略』である。これは、初版の簡略版であるが、私は「国会」という語を見つけることができなかった。

⁴⁵ S. Julien 1847:520-534は、すでに『海国図志』に「火車」が使用されていることを指摘している。

⁴⁶ 中国における蒸気船の歴史に関しては、Chen 1934、Chen 1961:40-41、Ros 1969を参照。

⁴⁷ Sir John Francis Davis 1852, I, 310-311参照。Chang His-t'ung 1950: 17より引用。

林則徐・魏源の著作と同じように、もう一冊の地理学書『瀛環志略』は、西洋諸国の政治面の知識を伝えることに貢献した。この本は徐繼畬によって執筆され、全10巻である。初版は1848-1849年の間と思われる⁴⁸。林則徐と同じく、著者の徐繼畬は福建・広東に派遣された役人であった。後に彼は西洋に対し興味を持つようになり、西洋諸国に関する資料の収集に情熱を傾けた。

『瀛環志略』は『海国図志』よりずっと簡略である。「地球論」と「地球図」の後に各地理的区域を論ずる章があり、その地域の地図を冠してある。徐繼畬は利用できるオリジナルの資料について分析を怠らなかつた。『海国図志』と異なる点は、徐繼畬は直接中国人の著作から引用し、しかも参考書物の範囲は極めて広いことである⁴⁹。本書のほとんどは一人の著者によって書かれたものであって、いろいろな文章をよせ集めたものではないので、『瀛寰志略』は『海国図志』より、文体は生き生きとしていて、読みやすい。著者は本書執筆の動機を次のように述べている（『瀛寰志略・自序』）。

道光癸卯（1843）、公務のため廈門に滞在した際、アメリカ人雅裨理に出会った。西洋の博学の士で、福建語を話すことができる。氏は、地図集を携えており、きわめて微細に描かれている。惜しいことにその文字が読めない。十数枚模写して、雅裨理に訊き、訳出した。おおまかに各国の国名を知ったが、忙しい中つまびらかにすることができなかった。翌年、再び廈門に赴いたとき、郡司馬の霍蓉生が地図帳を二冊購入した。一つは二尺余りの大きさで、もう一つは、一尺余りである。雅裨理の地図集よりもさらに詳細であった。また、西洋人による中国語の書物を数冊入手した。私も数種類を探し求めた。しかし、その本は非常に卑俗で、文化人は、読むに耐えない。私は、選り集め、一枚の紙でも捨てずに保存した。西洋人に会う度に、資料を開いて質問した。よって、諸外国の地形、情勢について、少しその概略を把握した。そして、図に従って論を立て、各書から信用できる資料を採集して、文章にし、ついに一冊の本に書き上げたが、その後も新しい本を入手し、或いは新しい見聞を得る度に、訂正増補を行い、初稿から数十回書きかえた。1843年から今日まで5年間の歳月が過ぎ、公務の余暇、ただこれを楽しみとしただけで、一日たりとも止めたことがなかった。

各章の序論の中でその国の地理と歴史が述べられている。著者は西洋諸国の歴史を詳細に

⁴⁸ Drake1975:55、note 8。Hummel1943:309-310は1850年としているが、第2版の時間と第1版の時間を間違えたのである。なお、総理各国衙門1866年版は、ローマBiblioteca Nazionale (72.d.28)で見ることができる。

⁴⁹ イエズス会士の地理学の著作に関しては、徐繼畬はアレニーの『職方外紀』だけ次のように言及している：「按、澳大利亜（オーストラリア）は、即ち西洋人が『職方外紀』で言っている天下の第五洲のことである。」徐繼畬が参照したその他の19世紀の西洋に関する著作は、Drake 1975:218-220の脚注2,7を参照。徐が言及した26種類の中国語著作についても Drake 前掲書を参照。

紹介している。読み物としても興味深い。徐は外国語ができないので、プロテスタントの宣教師が中国語で書いた著作を利用している。ただし彼は直接西洋人と付き合っていたので、書物の内容について西洋人に質すことができた。したがって徐の本は一般の意味での翻訳ではなく、中国語で書かれたその他の文献を利用した著述だと言える。

用語面では、徐継畚は音訳語を用いず、意識語 (loan-translation) を多用した。例えばイギリスに関して、“在國都有公會，分兩處，一叫爵房，一叫鄉紳房”という一節が見える。徐継畚は parliament の音訳語、例えば“巴厘滿”を用いず、“公會”を使用した。また“爵房”“鄉紳房”を使って、House of Lords と House of Commons を訳出した。house は“房”の意味であるが、林則徐の翻訳の中で house が“好司”と訳されていた。徐継畚は、また Lord を“爵”、Commoner を“鄉紳”と翻訳している。

『瀛環志略』では、“火輪車，火輪船，火輪機”等の語も使われている。

アメリカに関する章の中で、2つの伝統的な将校の名称“正統領”と“總統領”を見つかることができる。この2つの語はアメリカの governor と president を指し示している。同じ章の中では、また初めて西洋の選挙制度について紹介している。それまでに選挙制度を直接紹介した中国語の書物はなかった。この章は、恐らくブリッジマンの『美理哥合省国志略』に基づいていると思われる⁵⁰。

意識語に対する徐継畚の好みは、ただの偶然ではない。彼は、序文の中で実際にこの特殊な問題を取り上げて、「外国の地名というのは重要な問題である」と述べている。

彼もまた中国語と西洋言語の間に音声上、一致性を欠くので、外国語の同じ単語がしばしば幾つかの中国語に翻訳されると指摘している。徐継畚はさらに、当時中国に来ていた西洋人が広東語の発音を用いたので、その音訳語は正しい発音（正音、即ち北方方言の発音）で訳されたのではないと問題の核心を的確に捉えていた⁵¹。徐継畚は山西という北方地方の出身で、外国語の同じ単語に幾つもの音訳語が存在するという事実非常に敏感であった。彼はまた、「西洋の言語も同じではない」ので問題はもっと複雑であることを意識していた。徐継畚の問題解決法は、つまり各章のはじめに次のような注意書きを付けている。「本書の地名には、イギリス人が訳したもの、ポルトガル人が訳したものが含まれている。…今読者

⁵⁰ 徐継畚『瀛環志略』9巻15頁裏を参照。西洋の選挙制度に関するブリッジマンの記述は、『美理哥合省国志略』巻13参照。

⁵¹ 現代中国語においても、一部の外国地名は当時の方言音で訳出されている。例えば“加拿大”(Canada)は、元々広東語の発音に従っている (ganadai)。もし標準語で発音すれば (jianada) になる(ただし、“加拿大”を上海方言から語だと考えている学者もいる。詳しくは周振鶴他『方言与中国文化』235-236頁を参照。——中国語訳注)。

が識別できるよう、音訳語の異名を各国の後に注記している」⁵²。徐継畚が著作中に使用した音訳語の固有名詞や地名は、後に政府の公文書の中で広く用いられるようになった。これは徐継畚の努力の結果であり、彼の北方方言の発音知識に負うところが多かった⁵³。

しかしながら不幸なことに、1851年『瀛寰誌略』が出版された後、徐継畚が本書の中で示した西洋人及び西洋諸国に対する強い関心のために、親英的であると非難され、ついに福建巡撫の職を追われた⁵⁴。にもかかわらず『瀛環志略』は極めて大きな成功を収めた。『瀛環志略』は1859年と1861年に、日本で前後2回にわたって、和刻本が出版され、1874年にまた和訳本も出された。中国では1866年に総理衙門によって再版された⁵⁵。

一部の日本語に由来していると誤解された語は、実際には西洋を紹介する上記の著作を通じて、中国から日本に伝わり、後になってまた中国に戻ってきて、現代中国語語彙の一部分になったものである (1.5節参照)。

南京条約締結後、西洋人は広州、福州、廈門、寧波及び上海等の港に領事館を建てるのが許可された。これは、中国の他の地域への外国勢力の進出に、道を開いていた。外国人と中国人の接触は、広東からその他の港都市、そして内陸にまで広がり、それに伴って翻訳活動も活発になった。それまでに広州で作られた翻訳語や外国の概念を表す中国語の表現も、中国のその他の地域へと伝わっていく。

次の章で、清王朝が次第に翻訳問題に関心を寄せ、最初の洋書を翻訳する機関を設立する様子を見ていく。これらの機関は、主に西洋諸国に関する書物を中国語に翻訳する仕事を担当していたが、疑いもなく西洋の概念を表す語彙の普及にも貢献した。

⁵² 徐継畚『瀛環志略』1巻3頁より引用。

⁵³ 『瀛環志略』4巻4葉裏～5葉裏に表があり、その中で各国の異なる訳名が列挙されている。

⁵⁴ 『瀛環志略』に関して『瀛環志略訂誤』という校正本がある。『小方壺齋再補編』帙12に収められているが、作者は未詳である。ただしこの本では実質的な内容に言及しておらず、いくつかの国の地理的位置を正しているに過ぎない。Hummel1943:310、Chang His-t'ung1950:23参照。

⁵⁵ Hummel1943:310、実藤恵秀他1980:56、及びDrake1975:55, note8参照。

参考文献

- F.Masini, L'Italia descritta nel Qing Chao Wen Xian Tong kao, in *Rivista di Studi Orientali*, LXIII, 4, 1989, 285-298
- Dehergne, Joseph S. J., *Répertoire des Jésuites de Chine de 1552 à 1800*, Istitutu, Historicum S.I., Roma 1973.
- 王錫祺『小方壺齋輿地叢鈔』補編、再補編、杭州古籍書店1985復刻版
- 陳觀勝 Hai Lu, Fore-runner of Chinese Accounts of Western Countries, in *Monumenta Serica*, VII, 1942, 208-226
- 方豪『中西交通史』台北1983.復刻版、岳麓書社1987
- 胡秋原編『近代中国对西方及列強認識資料彙編』中央研究院近代史研究所、台北1972
『海国図志』60卷本、台湾復刻版、頁数はこれに従う。
- 徐鳴皋「開眼看世界的林則徐」『西南師範学院学報』1979年第2期38-48頁
Chinese Repository, Canton, 1832-1842.
- 来新夏『林則徐年譜』（増訂本）上海人民出版社1981
- Hummel Arthur W., *Eminent Chinese of the Ch'ing Period*, United States Government Printing Off., Washington 1943, 2 vols. 成文出版社1970復刻版
- 戈公振『中国報学史』商務印書館、北京1927、復刻版、三聯書店、北京1955、1986
- Britton Roswell S., *The Chinese Periodical Press, 1800-1912*, Kelly & Walsh, Limited, 上海1933. 復刻版、成文出版1976.
- 楊国楨『林則徐書簡』福建人民出版社1981年
- Hunter Williams C., *Bits of Old China*, Kegan Paul, Trench, & Co., London, 1855. 復刻版、成文出版社1976
- Chen Gideon, *Lin Tse-hsu: Pioneer Promoter of the Adoption of Western Means of Maritime Defense in China*, Peiping, Yenching University 1934
- 蕭致治・楊衛東『鴉片戰爭前中西關係紀事』湖北人民出版社1986
- 林永侯「論林則徐組織的翻譯工作」『林則徐與鴉片戰爭研究論文集』福建人民出版社1985
- 陳原「林則徐訳書」『人民日報』1961.5.4
- Brunnert H.S., Hagelstrom V.V., *Present Day Political Organization of China*, Revised by N.Th. Kolessoff. Translated from the Russian by A. Beltchenko and E.E.Moran, 北京1911.復刻版、成文出版社1978
- Corradini Piero, Intorno al Li-fan-yuan della dynastia Ch'ing, in *Rivista degli Studi Orientali*, XL, I, 1965
- Hucker Charles O., *A Dictionary of Official Titles in Imperial China*, Stanford University Press 1985.
- Hunter Williams C., *The 'Fan Kwae' at Canton before Treaty Days, 1825-1844*, kegan Paul, Trench, & Co., London 1822.復刻版、成文出版社1965
- Reprint: Southern Material Center, Inc., Taipei 1988.
- Fairbank John K., *China's Response to the West. A Documentary Survey, 1839-1923*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1954. Vth ed., id., 1979.
- Chang Hsin-pao, *Commissioner Lin and the Opium War*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1964
- George H. Danton, *The Culture Contacts of the United States and China*, Nes York 1931
- 鐘叔河『走向世界、近代中国知識分子考察西方的歷史』中華書局、北京1985
- Wylie Alexander, *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: Giving a List of their Publications, and Obituary Notices of the Deceased, with Copious Indexes*, American Presbyterian Mission Press, 上海1867. 復刻版、成文出版社1967

- Chen Gideon, *Lin Tse-hsu :Pioneer Promoter of the Adoption of Western Means of Maritime Defense in China*, Peiping, Yenching University 1934. Paragon Book Reprint Corporation, New York 1968
曾虛白『中国新聞史』三民書店、台北1966
- 海老沢有道 (ed.), *Christianity in Japan. A Bibliography of Japanese and Chinese Sources. Part. I* (1543-1858), Committee on Asian Cultural Studies, International Christian University, 東京1960
- Chang His-t'ung 張錫彤, The Earliest Phase of the Introduction of Western Political Science in China, in *Yenjing Journal of Social Studies*, 5, 1, July 1950
- Sir John Francis Davis, *China during the War and since the Peace*, London 1852
- Barnett Suzanne Wilson, "Wei Yuan and Westerners: Notes on the sources of the Hai-kuo T'u-Chih", in *Ch'ing shih wen-ti*, 2, IV, November 1970
- Bernard Henri S. J., Traductions chinoise d'ouvrages européens au Japon, Durant la période de fermeture (1614-1835) , *Monumenta Nipponica*, III, 1, 1940
- D'Elia Pasquale S. J., 『坤輿萬国全図』, *Il Mappamondo Cinese del P.Matteo Ricci S. I. (terza edizione, Pechino 1602) Commentato Tradotto e Annotato*, Biblioteca Apostolica Vaticana, Città del Vaticano 1938
- Ch'en Kenneth 陳觀勝, Matteo Ricci's Contribution to, and Influence on, Geographical Knowledge in China, in *Journal of the American Oriental Society*, 59 (1939),
- Chan Mimi & Kwok Helen 陳張美美, 郭張凱倫, *A Study of Lexical Borrowing from English in Hong kong Chinese*, Centre of Asian Studies, University of Hong Kong 1982. 復刻版1990
- Drake Fred W., *China Charts of the World: Hsu Chi-yü and his Geography of 1848*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1975
- 實藤惠秀・譚汝謙・小川博『中國譯日本書綜合目錄』香港大學出版社1980